Introduction

背景

　太宰は、1909年に青森県下屈指の大地主、金木村の津島家に生まれた。23歳のときに左翼非合法運動から転向し、1933年「魚服記」をはじめとした小説を書き始める。

第一期　1933年から1937年で、文庫本「晩年」（新潮文庫）には「魚服記」をはじめとする十五の小品が集まられている。この第一期は「死を意識した遺書としての小説群」（常用国語便覧）と呼ばれている。

第二期　1938年から1945年。この間の代表作品として「走れメロス」「東京八景」など８編が収められた短編集「走れメロス」（新潮文庫）がある。この第二期は、「生命の充実を得て」「明るく透明感のある作品群を残」（常用国語便覧）した時期といわれている。

第三期　1946年からであり「人間失格」（角川文庫）と「桜桃」は太宰治最後の作品となった。この1948年に太宰は、「山崎富栄と薬物を飲んで玉川上水に身を投じ、命を絶った」（常用国語便覧）。39歳であった。

目的（疑問と予想）

　太宰治が16年間の作家活動で残した一連の作品は、一般に3つの時期に分類されるといわれる。しかし、太宰治の文体もそれと同様に変化しているのだろうか。その点に疑問を持った私は、その特徴を探っていくことにした。

Method　文体の統計的な分析方法

1．一文の長さの比較

　1期～3期のそれぞれの作品群から50の文を無作為に選び、文の長さを調べヒストグラムに表す。下の例は、住野よる「君の膵臓を食べたい」の中から、５０の文を無作為に選び、一文の長さの出現率をヒストグラムとして表したものである。

２．句読点の数の比較

　1期～3期のそれぞれの作品群から無作為に10ページ選び、そのページの句読点の数の出現率をヒストグラムに表す。